この作業の間によく駅へ原木やれんがが到着して、一日の作業が終わって疲れと空腹で収容所へ帰ったのに、夕食を見ながら空腹で再び作業に行くのがつらく、ほとんど残業の夜間作業であった。

このときは一人でも怠ける者はなく、原木おろしなど、わきに柵として立っておる丸太を根元から鋸で切って崩し、一気に片づける危険な方法が取られ、崩れ落ちる原木に挟まれて命を落とした人もあった。そして『カンチヤイネエト、クーシヤイネエト。』（終わらないと飯を食わせないぞ）の罵声も捕虜の境遇では、ただ黙って悔し涙を耐えて作業を続けるほかなかった。

二十四年十月三十日、信洋丸で舞鶴上陸。帰郷するも妻の元気な出迎えはなく、このときになって初めて平壌での死亡を知った。

興安嶺からウラルを越えて

岩手県　西　富一郎

興安嶺を踏破して音徳爾到着まで終戦を知らずに、激闘を繰り返しながら後退転進中の我が第百七師団は、日の丸標識をつけた飛行機飛来により停戦を知り、この地で武装解除となった。（八月二十九日）

自由なき生活が始まる。興安の河岸まで疲れと空腹に耐えながら強行軍。興安で野宿したが、夏物衣服のため寒かった。翌日も行軍させられて、徳伯斯（トボス）に到着。食糧の配給もないので極力代物を求めに努めたが、警戒兵の監視が厳しく、射殺されるので空腹の日々を送り、チチハルへ移動して、作業大隊が編成された。

昭和二十年十月二十七日、満州最北端の満州里よりソ連領内に向け、貨物列車に乗せられ初冬の夕暮れ発進。スピードを出して走る。暗やみがやってくる。車

内は明かり一つない。列車の進行方向が見当つかなくなる。夜が明けて車内では、ウラジオかモスクワかと、進行方向について論議された。願はくば東にと祈ったが、西に進行中の見方が多く、途中太陽の位置で、すでにシベリア鉄道に入ったことがわかった。

列車の進むにつれ寒気も厳しく、日本と反対方向なので、祖国と遠くなっていくのは、ますますやみに入っていく気がした。列車は一日数回は停車する。しかし、なかなか下車させてくれない、用便にはだれもが困り、進行中の貨車内から少し戸を開いて放した。

山峡を走り抜けてからは、山を見ることもなく樹木も民家もない平原を三日走り。次にシラカバ林の多い山峡にさしかかる。小雪が降って、一面に真っ白になっていた。暖房のない貨車では、だれも体を寄せあって震えながら寒さに耐え続ける。列車は停車した、全員下車する。先を競って駅付近に一斉に用便する。千五百人の集団を眺め捕虜とは申せ、哀れでならなかった。寒さが厳しいので下車後は、だれも足踏みしている。

私の所属している小林隊の三百人は、この作業大隊から離れ、小集団になって寂しく感じた。この駅舎から三百メートルくらい離れているので、地名も知らぬままこの地を去る。一昼夜半後に、シベリア鉄道に近い木材の町タルバカタイに到着。

板塀と有刺鉄線の回された望楼のある捕虜収容所に入れられ、抑留生活が本格的に始まる。室内はまき用のペーチカがあり、床の一部は上げ床で、その上にアンペラの敷物が敷かれてあった。他の部屋はお粗末な松の皮板で、二段式の居室につくられている。何一つ自由行動ができなく、厳しい警戒である。雑役等で、所外に出た者がいろいろと情報を聞いてくる、我々が入所する前には、ドイツ人捕虜が労役に服していたとの話である。

この町は極く小さい集落で、付近一帯は山波をなした松林があり、鉄道用枕木の製材を主体としていた、林業の町なので。到着の翌朝六時に人員点呼を受けてから、土地の一般労働者に混ざり、製材工場の仕事に小隊単位で配置され、枕木のあら皮削り、製品の運搬、

丸太の転木、燃料用まき切りと、さまざまな作業が課せられた。

作業の指示監督は、町からの年配者が多かった。ノルマの達成を強く要求される重労働で、能率が悪いと給与が減らされて、体力の低下に連なり労働せざるを得なかった。夕方に作業が終わり五列縦隊に集合して、警戒兵の人員点呼を受け帰営。その際警戒兵の目を盗み、製材の皮板の極く小さいものを防寒外套の中に隠して、部屋の燃料として暖をとるために運ぶ。しかし、半分自分たちの部屋に届けば上出来で、他の半分は衛門の警戒兵により没収されるのが常となった。

積雪は二十センチくらいだが、日増しに厳しい寒さには驚くほかなかった。夜明け前から空腹のため大方の者は起きて、朝食を待っている。朝食と昼食は一緒に分配される。

黒パン、二百五十グラムにヤギの骨と甘藍が少し入った汁の給与が長い間続く。炊事係により分配されるパンの大小が問題となるほど飢餓に責められた。

ソ連人の話では、終戦の年は国内は凶作でソ連人も配給が少なく我慢の日々が多いという。捕虜の給与が極端に少ないことは警備の兵士により糧秣を横流しされたことで、至極日本人の心身が弱り、栄養失調患者もこのころに出て、故郷の肉親の名を呼び、あるいは空腹のためパンをと叫び、また作業事故等で亡くなられた方も出て、人間の限界を過ぎ、従って食べることと、たばこの話以外は言葉はなく、朝の挨拶も今日のパンは大きいか小さいかが毎食かわされる。

収容所内寝静まったころに、ソ連兵四、五人組が、毎晩のように我々捕虜の腕時計を主に、所持品を目当てに取り上げにやってくる。武器なき日本人はいたし方なく、種子田通訳よりソ連側にやめるように交渉したが効果なく、考えた末、彼らが部屋に来て取り上げ始めたときには、室内全員そろって大声を張り上げて、泥棒と叫びながら、まき材などで床板をたたいて追い返しに成功。このようなことが三か月くらい続き、その前後も所持品検査は数多く実施される。少尉の政治部員が当収容所に出入りするようになって、所長が交替になった後は、給与の糧秣も少し改善され、物取り

も全くなくなったが、そのときには貴重品をはじめ所持品はだれも持たなかった。勝者と敗者の違いとはいえ、ソ連人に対してこのときほど不信を感じたことがなかった。

日増しに南京虫とシラミは大繁殖して、板床に毛布の半びらで体を巻き、眠ろうとするが体を刺すのでなかなか眠れない。着替えもなければ、入浴もできないので、頭から足首まではシラミがふえて、これがチフス等の伝染病の媒介となる。水が自由に使えない。顔など洗ったことがなく、室内の暖炉の煙で自然にだれもが黒い顔になる。飲み水の不足は、所内の庭から汚れた雪を、古びた飯盒や空き缶を利用して、ペーチカで溶かして水の補給に努めた。体がだるくなり大方の者は、顔が青くなってむくみ始める者多く、厳寒の最中のため、野草あるいは他に食物を手にすることは不可能で、体力維持のために、枕木のあら皮下の甘皮を火であぶり松皮もちとして食べ、春の来る日を祈りながら待ちわびた。

小集団三百人から、石川小隊の組は遠い山奥の山林伐採で離れ、寂しい思いもあり、殊に仲間が伐木の下敷きになって無念の死を遂げる悲しいこともあった。分散により生きる方策を考えずにはおられなく、心ある仲間を誘い、種子田通訳を先生にロシア語の勉強を始め、作業から帰ってから一時間の特訓を受け、毎日単語を数多く覚えて、ソ連の監督者や警戒兵との会話により、言葉を自分のものとした。

各所に雑役で働く日もあったが、真夜中に鉄道貨車が入ると、枕木の積み込みをさせられ、零下四十度以上の厳しい寒さの中、投光機の明かり頼りに、凍結した足元に注意しながら必死に頑張る。これがシベリア最大の地獄であったかもしれない。疲労のため亡くなられた方々には、話す言葉もありません。

寒さと疲労のために、私は発熱して、戦友のはからいで医務室に入室することになり、その体温三十九度五分もあって、ただもうろうとなった。入室するとき、そばにいた者が「危ない」と私の病状を話した声が記憶に残り消えなかった。重病の峠を越えて快方に向かったときには、同室に九人の栄養失調患者が寝ている

のに気づいた。入室しても薬もなく、おかゆが少し上がるだけである。あのとき医務室で看護してくれた衛生准尉さんに対して生涯感謝しております。

室内清掃に努めても、シラミが至極繁殖する。新任の所長に交渉の結果、町の滅菌所で捕虜の衣類を全部熱処理することになった。この方法は日本の土釜式で、その中に衣類をつるし、約二時間の加熱で終わる。丸太小屋で裸のまま衣服のくるのを待った。

このころ初めて入浴することになり、町営の浴場に行く。浴槽はなく一人にたらい一杯の配給で洗い流すのである。蒸し風呂では町民たちはシラカバの小枝をたばねたもので肌をたたいていたが、我々は使用できなかった。

製材工場内の仕事や山林伐採等から、木材運搬の積み込み係りを命ぜられ、私は長になってソ連監督者と話し合いながら、直径六十センチ内外、長さ八メートルの松丸太を雪の中から掘り出して、大型トラックの台車に輪棒を渡し、その上を転木して積み荷をするのである。一人の怪我人も出さずに一致団結して、上手に仕事を長くやり続け、ソ連監督者からも好感を持たれた。

収容所長の特別のはからいで、町の集会所に映画見学と、広場でのソ連人の音楽とダンスの夜に招待を受け、その上たばこをもらって、二時間くらい、捕虜の身を忘れた。映画は第二次世界大戦での独ソ戦の一幕で、雪の中でのソ連軍斥候の勇敢な闘いの場面で、そのあとマンドリンの響きに合わせて活発な若者のダンスを見て帰った。

昭和二十二年早春に、ソ連の身上調査を受けて突然ダモイということで、戦友とお別れ挨拶もせずに忙しく、無蓋貨車の石炭の上に乗せられ、着いたところはフウシンガという収容所。給与は前任地よりよく、民主運動も至極活発で、演劇などもあった。前地では毎朝皇居遙拝をやり、軍律により統制が保たれていたので、驚きのほかなかった。ダモイを信じて収容所をさらに三か所を経て復員。

入ソ後厳しい寒さと少ない給与、加えて重労働のため、異国の凍土に化した戦友を思うとき、よき社会づ

くりに務め、二度と轍を踏まぬことを誓い、ご冥福をお祈りいたします。

シベリア抑留への道程

新潟県　森　肇

シベリア抑留への道のりの発端は、昭和二十年八月九日のソ連軍の参戦であった。当時私の所属する部隊は旧満州国と内蒙古との国境に近い通遼に駐屯しておった。私は、ソ連参戦の八月九日の前後のある日、重大な命令を受けた。三十五人ほどの仲間とともに隣の駅双遼で任務達成の器材や糧秣等十分な準備を整え、満州国の西北部にあたる白城子に向かって出発しました。チチハル方面から邦人を乗せ、交差させた日の丸を機関車の両面につけて、引き揚げの最後の列車として我々の待つ場所に到着した。この引き揚げ列車を付近に待たせ、任務を遂行してはその列車で奉天に向かって南下しました。第二、第三の任務を遂行しながら同年の八月十五日に奉天に帰ってきました。

途中の小さな駅で、老人の男性三、四人と女性、子供合わせて二十五人くらいの邦人が着のみ着のままでいつ来るとも知れない列車を待つ一団に会った。男性の一人が私のところへ来て、列車に乗せてください。どうか助けてくださいと言いました。私はなんらちゅうちょすることなく、最後の引き揚げ列車であることを知らせ、同乗させて奉天まで一緒に来ました。同乗した邦人から、八月十五日戦争は終わりました、そして負けましたと聞かされました。余りの驚きで、まだ半信半疑の気持ちで聞いておりました。子供たちは安心したのか、これまでの疲れと寝不足のためか、すやすやと眠る姿を見て、同乗させてよかったと思っております。仲間から軍用列車に一般人を乗せたと非難する声もあったようだが、あの当時の人たちは今どうしておるだろうか、思いを寄せております。

私たちの本隊は奉天の飛行場に駐留しておったので、司令部で報告を済ませ、終戦を確認して本隊と合流しました。いよいよソ連軍による武装解除の日が近